
首相の恋

テイスティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

首相の恋

【Nコード】

N9903A

【作者名】

ティステイ

【あらすじ】

洋次郎は、首相としての任期を終えた。かつて、果たせなかった見果てぬ夢・・・彼は、最終章へと向かう次なるステップを、愛しい女性と共に歩み、生きんと、新たな航海に出て行くのだった。

第1章

順子、元気かい？もうすぐ、あの日に戻るよ。待つて欲しい。

僕は、もうSPもつかない自由な身だ。

これから、この5年間の総括を、自分なりに本にまとめるつもりだ。それが終わったら、南米大陸をもう一度、青春時代の軌跡を辿りながら歩いてみたい。

勿論、君と一緒に・・・。

世間には、僕が独身だったから、支持率調査の鍵を握るオバサン受けがよかったんだと揶揄する人もいたが、秘められた僕らの恋愛劇場の存在を知ったら、何と言っただろうか？

変人なんかに愛された君は、好奇の視線に晒されて、つらい思いをするかもしれないな。

人は、死という時限爆弾を体内に宿して生まれてきて、100年を待たずして、確実に逝く定めだ。

僕の残された時間も、1桁台に突入したかもしれない。

だから、どうしても最終章への道程は、君と歩きたい。

航空券を同封した。

3月17日、僕らが32年前に別れたあの場所で、あの時間に待っている。

きっと、必ず来てくれると信じている。

洋次郎さん、やっと終わったのね。

いろんな中傷や批判の中で、あなたは決して揺るがなかった。
自分の信じたロマンを、ひるまず貫き通したわ。

「死んでもいい」・・・って言い放った渾身の舞台、ずっとハラハラしながら見守ってた。

そして、私は、洋次郎さんのためなら「死んでもいい」と思ってた。

残りの人生は「散りぬべき 時知りてこそ 世の中の 花も花なれ
人も人なれ」なのでしょう？

許されるのならば、お供したいと思います。

僕は、大学を出て、少し会社勤めをした後、ボストンの大学に留学した。

政治学の勉強とは名ばかりで、実際は、それ以前の語学留学、いや遊学といったところだった。
だから、毎日よく遊んだ。

ある朝、二日酔いで、目覚ましにコ・ヒ・が飲みたくなって、カフェに入った。

だけど、エスプレッソを注文したのにカフェ・オレが出てきたんだ。
「It is not my order」と言っと、ウェイトレスは「二日酔いには、こっちのほうがいいわ」と平然と日本語で言った。

「何言ってるんだ！。自分の間違いを棚に上げて居直るなよ！」と声を荒げると、相手は謝るところか、「私は生活費と本代を稼ぐのに

精一杯の苦学生なの。朝からお酒の匂いをプンプンさせてるお金持ちの留学生と違って、清く正しく、ついでに貧しく生きてるの。お金持ちは慈善が好きで、貧乏人に寛大なんですよ。私が、このミスオ－ダーが原因でクビになったら、あなた、心が痛まない？」

大きな黒目がちの目が、僕を見据えて言った。

そして、呆然と何も言葉が出ないでいる僕を残して、行ってしまった。

君との出会いは、こうして君が圧倒的に主導権を握るかたちで、始まったのだった。

それから、理由はよくわからないまま、僕は毎日、朝食をとりその店に通った。

いつも君が注文をとりに来て、エスプレッソを頼むと、ニンマリと笑って、カフェ・オレを運んできた。

10日通いつめたところで、ついに敗北を認めて、カフェ・オレを注文すると、なんと、念願のエスプレッソがやっと出てきたんだ！そして、君が得意そうに「やっと降参？」と、初めて白い歯をみせて微笑んだ。

そして、なんと説明すればいいのだろうか……。この瞬間、僕は崖から突き落とされてしまったんだ。

僕は、見事に、あっけなく、恋の樹海をさまよう流浪の民となってしまった。

君は、これまでの僕の周囲にいた女たちとは、全く違っていた。負けず嫌いで、ストイックなくらいの努力家で、強い意志を持った

女性だった。

でも、その反面、ちょっとしたことで涙したり、有頂天になったり・
・・。

繊細で、ほとばしるような感性の持ち主だった。

頑固で、時々、憎たらしい君と、可愛くて抱きしめたい君が混在していた。そして、君は、とても綺麗だった。

第2章

若い僕の煩惱は日夜、葛藤し続けた。君の透き通るような白い肌。鎖骨の周辺の艶かしい造形美……。手が届きそうで、永遠に届きそうにないように思える君の存在……。

だが、僕は、その責苦を自分に目標を課して勉強に打ち込むことで昇華していった。

僕は心底、この出会いを1%の奇跡だと信じるようになっていた。だから、君のためにできることは、何でもしてやりたかった。君の笑顔をいつも見ていたかった。

だけど、君は「あなた好みの女にしようたって、そうはいかないわよ」と、僕の僅かな経済的な援助も、すげなく断るのだった。

好きな女性が、朝から晩まで身を粉にして働き、睡魔と闘いながらレポートを書いている姿を間近に見ていると、ただ単に、君が女性として素晴らしいから……という理由を超越して、僕は厳粛な気持ちで、君に敬意を覚えていた。

僕は、『カルネアデスの船板』を思い出した。

これは、もし船が難破し漂流した時、2人でつかまった船板が1人分の重量にしか耐えれないとわかった場合、自分の命を守るために相手を殺しても罪に問われない……という法律上の解釈をいう。もし、そんな状況下ならば……。と、僕は考えた。

そして、迷わず、君を残すために自死の道を選択するだろう……。と確信したんだ。

どんな自己犠牲を払っても、必ず君を守ってやりたい。

それは、それまでの僕の中には存在し得なかった異質な感情だった。

そう、あきらめるほどに、僕は君に恋をしてしまったのだった。

第3章

それぞれの持ち場へ帰る日は、思ったより早くやってきたわ。

私の家の生計は、父が毎日、夜遅くまで生地を裁断して、手縫いで背広を仕立てることで成り立っていたの。

母は病弱で寝たり起きたりだったし、弟は、まだ高校生だった。

私は、奨学金でT女子大の英文科に進学し、幸運にも学内選抜で、ボストンのR女子大に交換留学できた。

たとえ生活は火の車でも、将来の希望とあなたの存在が、そんな私を支えてくれていた。

でも、突然、父が脳梗塞で倒れて半身不随になり、私が母や弟の面倒を見なくちゃいけなくなった時、私は決心したの。
あなたとの恋を諦めようって。

だから、アメリカを発つ時、あなたに嘘の電話番号を言った。

帰れば、生活に追われる日々が待っている私と、お父様の跡を継いで、政治家としての栄光の階段を昇っていくだろうあなたとでは、やはり住む世界が違いすぎたわ。

あなたも、電話番号が嘘だとわかった時点で、その意味を汲んで、私を忘れてくれるだろうと思ってた。

でも、あの日、家の前で、こぶしを握り締めて、寒さに震えながら待っていてくれたあなたを見て、胸が張り裂けそうだった。

探し出してくれて、そして、本当に大事に思っていてくれてありがとう。死ぬまで、この感謝の気持ちだけをたよりに生きていける・・・

そう思ったの。

やっと、あなたへの想いを、生きる力に転化する元気が湧いてきたわ。

ずっと遠くから、相手を大切に想い続ける愛があってもいい・・・
そう確信できたのよ。

それからの私は、寝る時間も惜しんで勉強して、空いた時間は、貿易会社のアルバイトをして頑張ったわ。そして、卒業すると同時に、アルバイト先の社長に求婚されて・・・

彼は、20歳も年上だったけど、温かい人柄で、母や弟に本当によくしてくれたの。

彼の経済力と理解のおかげで、私は勉強が続けられ、大学院で英文学の博士号も取得できた。

彼は、8年前に亡くなったけれど、私は、彼との結婚を後悔したことは一度もなかったわ。

第4章

順子、君が結婚したことに僕は驚かなかったよ。責任感の強い君は、僕と別れた時点で、自分の身の処し方を決めていたんだろうと思うたからね。

あの日、訪ねて行った僕に、毅然と涙ひとつ見せず別れを告げた君を、僕はとても立派だと思ったよ。そして、自分も、君に恥じるような醜態を演じまいと心に誓った。

だから、君の結婚を見届けてから、翌月、僕も静かに玉砕した。

だが、この結婚は、男の子を2人もうけて、やはり、というか必然的に10年目で破局した。

離婚について、僕が弁明することは何もない。

ただ、家庭を持って、女性とつきあっても、君の存在がいつも心から離れてくれなかった。

心から愛してやれなかったんだよ、女房も恋人も……。

そんな矢先、不謹慎かもしれないが、君がまた独身に戻ったと知って、僕は高揚する気持ちを抑えられなくなった。

君を教育諮問委員会に招聘したのは、僕の在任中で唯一、私情を交えてしまった人選だっただろう。でも、それを悔いてはいない。なぜなら、僕は君の前で、君に恥じない指導者であり、男であろうとやせ我慢し通したからこそ、今の僕があると思うからだ。

たとえ満身創痍になっても、ぶれない決断を貫き通してきた君を前にして、逃げ出す訳にはいかなかったからね。

そして、そんな僕を君は5年間、ずっと見守ってくれた。感謝している。

あとは、もう一度、あの日に帰って、僕たちの続きをやり直したい。それだけだ。

洋次郎さん、本当に私でいいの？

今のあなたは、私には手が届かない、遠い存在になってしまったような気がするわ。

あなたのパートナーならば、若くて綺麗な女優さん、お金持ちの女性起業家、頭の切れる専門職のキャリア・ウーマンとか、好意をもってくれてさえいれば、候補は沢山いる筈よ。

だから、なぜ私なのか、とても不安なの。

昔の名前で出ている歌手をひいきに思う程度ならば、どうか、このままそっとしておいて欲しいの。

最終章

私は、卑屈になりすぎているのかしら？

あなたとは、委員会で二言三言、言葉を交わす程度だったけれど、事あるごとに、秘書の方が、オペラや相撲の招待状を送ってきて下さったわ。

あなたが、努めて、私に共通体験の機会をつくって下さったことは、痛いほどわかっていたの。

そんなによくしてもらって、この上、何をためらう必要があるのか・
・と思われるでしょうが、男女の仲は、友人関係とは違うわ。

私は、もう、あの頃のように若くないわ。

あなたが、かつて愛して褒めてくれたものは全て失われてしまって、私は、かろうじて残った形骸を引きずって生きているような状態よ。あなたに、愛される自信なんて、どこを探しても見つからないわ。

順子、君を好きなことに、いちいち理由がいるのだろうか？

君の言うことを聞いていると、僕はガッカリするよ。

昔の君は、よく僕に言ったよな。

「こんな美人で、聡明で、将来性のある女性は、あなたなんかには勿体無い」って。

君は、本当にうぬばれ屋で、平気で僕の心に土足で踏み込んできて、僕を夢中にさせておいて、僕を翻弄し尽くした拳句、最後は何も告

げず去って行った。・・・本当は、君は僕にひどいことをしたんだよ。

でも、僕は、君のことが好きで好きでたまらなかった。だから、惚れた弱みだろうな。最後まで、僕は君を責められなかった。

順子、年をとったのは君だけかい？

相変わらず、君は、稚拙なうぬぼれ屋さんのままだな。

大体、綺麗で、賢くて、実力があって、優しい女なんて、僕の周囲を見渡しただけでも、ごまんというんだぞ。

じゃあ、なぜ君なのか・・・。

君は知りたくてたまらないらしいが、僕も解からないことを、君が解かると思うかい？

いいかい、直感を素直に信じるんだ。

何が正しくて、何が誤りだったかなんて、多分、僕らがいなくなつた後世で、世評が勝手に決めてくれることなんだよ。

今、正直に、僕を愛してくれているのなら、絶対に、つないだ手を2度と離さないで欲しい。

僕は、必ず君を守るから。そして、必ず幸せにするから。だから、信じる。

今の君には、それしかないんだよ。

目をつぶって、激流に飛び込む勇気を持つんだ。

後に残る抵抗勢力は、僕に任せろ。

ケンカして、あいつらをぶつつぶすのは僕の仕事だ。心配するな。

順子、過去にとられるのは、もうやめよう。

僕も君も、もう既に、再び回帰しない旅に出発する心準備を終えたはずだ。

違うのかい？

さて、これからのスケジュールだが、君と再び出会えたら、まずプロ・ドウェイに行こうと思う。

そして、眠らない街、ビッグ・アップルで、ひからびた感性に充電して、夜が明けたら、今度こそ、ケンカしないで、二人でエスプレッソを飲もう。

そして、その後は・・・

うん。

ずっと、ゆっくり、君と・・・そう、愛し合いたいんだ。僕らの最終章まで・・・。

おわり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9903a/>

首相の恋

2010年10月21日22時35分発行